

中央アルプスにおける登山ガイドと地域とのかかわり

－伊那市・駒ヶ根市における関係組織の分析－

松村健太郎・山本 純・佐藤大輔・呉羽正昭

本稿は、中央アルプスにおいて「木曾駒ヶ岳」を中心に活動する山岳会および南信州山岳ガイド協会の事例に、登山ガイド活動の役割とその成立基盤を明らかにした。中央アルプスにおける登山ガイド活動は、伊那市・駒ヶ根市に1950年代に発足された山岳会の活動を基盤としていた。各山岳会では、海外遠征登山、学校登山の引率、遭難防止対策協会への協力等を経て、登山ガイド、山案内人としての知識創造や人材育成がなされた。山岳観光業としての登山ガイド活動は、南信州山岳ガイド協会設立に伴い、旅行会社などからのガイド活動の委託と受注を協会が集約し、県内外の観光アクターと連携を図ることで継続的に登山ガイド活動を遂行することが可能となり、この点が発展の契機となった。その一方、山岳会会員、認定登山ガイドの高齢化が進むとともに、ガイド業を専業として経済活動の中心とするガイドは僅少であり、経済的持続性については今後の課題である。

キーワード：山岳観光、登山ガイド、木曾駒ヶ岳、中央アルプス、地域住民

I はじめに

I-1 研究背景と目的

1990年代「持続可能な発展Sustainable Development」の概念が世界的に普及し、今日では「持続可能な観光Sustainable Tourism」の創造が課題となっている。そのなかで、観光地域をめぐる環境も大きく変容しつつあり、既存のマス・ツーリズム型観光地域は構造的変化を余儀なくされている。日本においても、観光形態はマス・ツーリズムの概念を包含しつつも行動の多様化がかなり進み、マス・ツーリズム型観光地域の構造的変化がみられる。しかし、マス・ツーリズム型観光地域の変化に正面から取り組んだ研究はKureha (2008) がある程度であり、現状把握にはいたっていない(呉羽, 2009)。

持続可能な観光の創出に際し、石森(2001)は「内発的観光開発」が最重要条件であると言及している。内発的観光開発は地域住民の生活水準の向上を目的とし、地域観光資源の持続的な活用方策を

検討することである。観光地域の「自律性」を基盤とする内発的観光開発では、結果として地域住民の自主的・自律的な行動が向上する点が期待される(敷田, 2008)。

ところで、人気やブーム度合いの盛衰はあるものの、本格的な登山、またそれほどの専門技術を必要としないトレッキングは、山岳地域における重要な観光形態である。著名な山岳目的地に至る登山口周辺の山麓では、活動者が集散する観光地域として成長する潜在性をもつ。そこでは、前述のような持続可能な観光を推進することが今後ますます求められる。その際、登山ガイド¹⁾を媒介とするツーリズムによって、持続可能な観光形態をもたらす可能性が大きいと思われる。ガイドの同行は環境負荷の軽減にも役立ち、ガイドの解説がトレッカーの知的好奇心を満たすことで持続性をもたらすことが期待される。しかしながら特定の山域における登山ガイドの活動実態や組織変化について言及した研究はこれまでほとんどみられない。登山ガイド活動がどのように展開している

のか、いつどのようにガイド技術が習得され、ガイドが組織化され、いかにして継承されるのか、その実態は不明瞭である。

以上を踏まえ、本稿では「木曾駒ヶ岳」を擁する中央アルプスにおける登山ガイド活動の展開とその成立基盤について、ガイドの具体的な活動実態を通時的に分析することにより明らかにすることを目的とする。また、持続可能な観光の創出を考慮しつつ、地域住民による登山ガイド活動が地域社会に対して果たす潜在的な役割についても議論する。研究対象地域は中央アルプス山麓の伊那市および駒ヶ根市である。

まずⅡ章では既往文献および山岳会・ガイド協会への聞き取り調査に基づき、伊那市および駒ヶ根市における中央アルプスと関係する山岳会の歴史的な変遷を示し、現在のガイド組織に至る構築過程を明らかにする。Ⅲ章では、対象地域に在住する登山ガイドがどのように山域を利用し、観光アクターとどのような関係性をもちながら活動しているかという視点で分析する。具体的には、聞き取り調査によって、観光資源としての中央アルプスの活用方法に着目しながら、観光アクターの山岳観光に対する取り組みを示す。Ⅳ章では、地域社会と登山ガイド活動の関係性に着目する。ガイドへの聞き取り調査によって登山ガイド活動の実態について分析をおこない、中央アルプスにおける登山ガイド活動の地域的展開を明らかにする。以上を踏まえ、Ⅴ章では中央アルプスにおける登山ガイド活動の展開とその成立基盤を考察する。加えて、持続性の観点から中央アルプス山域の山岳観光の課題を導出する。なお、本研究の現地調査は2017年10月および2018年5月に実施した。

Ⅰ-2 研究対象地域の概要

本研究で対象とする木曾山脈は、「中央アルプス」と呼ばれる。「中央アルプス駒ヶ岳」はその最高峰で(標高2956m)、木曾谷では「木曾駒ヶ岳」、伊那谷では「西駒ヶ岳」と呼称されている。通常「駒ヶ岳」と略称されるが、本稿では「木曾駒ヶ岳」と呼称を統一する。1951年に中央アルプス一

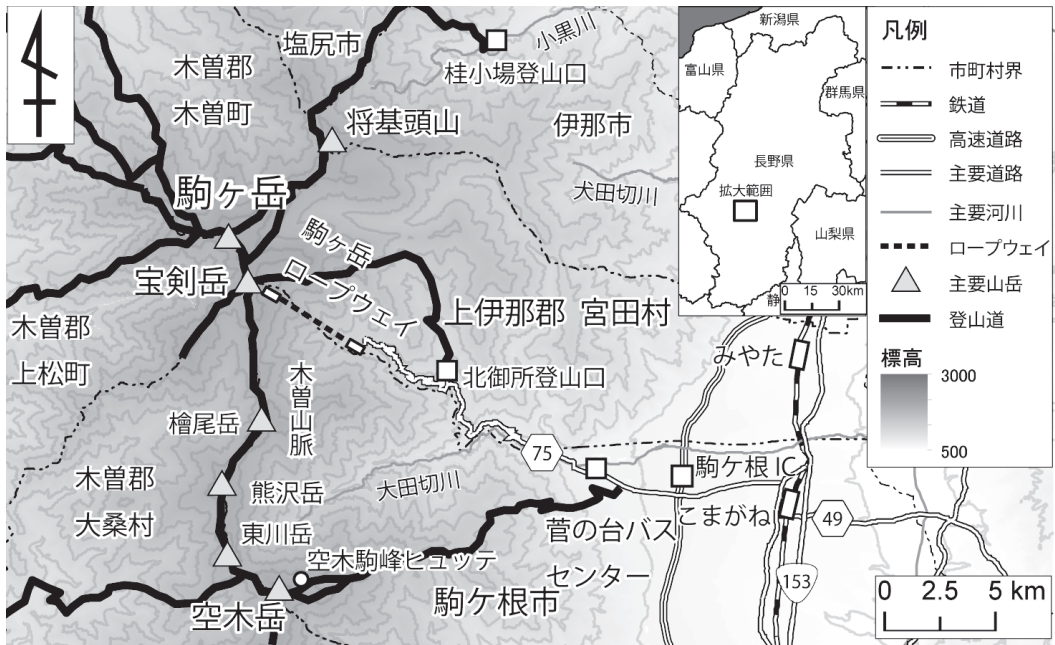
帯が「中央アルプス県立公園」に指定された後、1971年に長野県の天然記念物に指定された。現在では年間約25万人が訪れる県内有数の山岳観光地となっている。山頂は上伊那郡宮田村と木曾郡木曾町(旧木曾福島町)、上松町の3町村の境界に位置する(第1図)。木曾駒ヶ岳の地形は千畳敷カール(写真1)に代表される馬蹄形にえぐられた典型的なカール地形を示している。また植物の垂直分布帯が完全に発達しており、森林限界を超える部分には種々の高山植物群落や構造土、岩塊地などが分布している(小泉, 1974)。

地域住民と木曾駒ヶ岳登山活動との関わりは深く、明治30年代から心身の鍛錬の場として学校生徒による集団登山が始まった。1913年には中箕輪小学校生徒37名による登山で、校長とともに11名が遭難死する事件があった。遭難現場には当時の上伊那郡教育会が建てた「遭難記念碑」がある。これは慰霊碑ではなく、「事実を謙虚に受けとめ、万難を排して高きを求めるべし」という高邁な教育信条として、今日の集団学校登山に受け継がれている。現在でも伊那谷と木曾谷の中学校では、綿密な計画と周到な準備のもと、毎年の行事として定着している。木曾駒ヶ岳を集団登山の目的地としている学校数は減少しているが(第2図)、長年にわたり大きな事故もなく継続している。この一連の行事においては、学校からの依頼として同行している登山ガイド・山案内人ならびに山岳会会員の存在と役割の持つ意味が大きい。

Ⅱ 中央アルプス周辺の登山ガイド組織と山岳会の特性

Ⅱ-1 ガイド組織の特性

研究対象地域を拠点にする登山ガイド組織には「南信州山岳ガイド協会」がある(所属ガイド29名)。本協会は、公益社団法人日本山岳ガイド協会²⁾の正会員団体であり、伊那市や駒ヶ根市を拠点とする日本山岳ガイド協会認定ガイド、信州山案内人³⁾の資格を持つガイドを有する中央アルプス唯一の山岳ガイド組織である。ここでは本組織



第1図 研究対象地域（2018年）

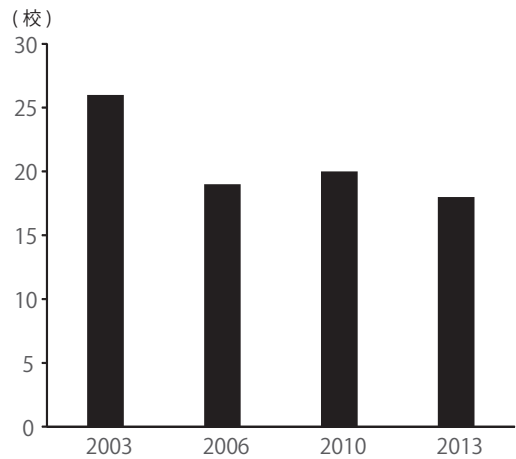
注) 空木駒峰ヒュッテ以外の山荘は第3図に示す



写真1 千畳敷カール

およそ2万年前の最終氷期の極相期に氷河の新色によって形成されたものであり、馬蹄形に深くえぐられた典型的なカールの地形を示している。カールの底は平坦で、そこに小さな池がある。様々な高山植物が咲き乱れる。

(2017年10月 松村撮影)



第2図 木曾駒ヶ岳中学校登山実施推移 (2003年～2013年)

(長野県山岳総合センター資料より作成)

の設立契機や代表的な活動内容に着目しつつ、その特性を説明する。

この協会は、大正時代「中央アルプスガイド組

合」として組織され、その後は中央アルプスだけでなく、南アルプスも含めた多くの山域をガイドするようになり、活動範囲は拡大していった。そ

のため組合の発展的解散を行い、「特定非営利活動法人 南信州山岳ガイド協会」として法人化された（2006年）。法人化を契機としてそれまでの活動で培われた経験をもとに、地元に着した山の知識や情報を提供し、地域住民、そして中央アルプスで登山者⁴⁾を案内するなかで自然環境保全の意識を高め環境保全に寄与すべく活動を行っている。本ガイド協会では主に「山岳ガイド」「ネイチャーガイド」「ポーター⁵⁾・山岳地域における調査サポート」の3つのサービスが活動の主体となっている。

「山岳ガイド」活動においては個人、団体、ツアーを問わずガイドの派遣を行っており、安全管理と道案内だけでなく、登山者の活動技術を向上させる講師としての役割も持つ。また「ネイチャーガイド」は地域に根差した活動の代表的なものである。伊那谷の歴史や文化、花、植生の解説などを専門とするガイドが所属しており、千畳敷カールにおいては高山植物を専門にガイドを行うこともできる。また映画やコマーシャル撮影などの際に、荷物を運ぶ「ポーター」としての役割や、研究機関による山岳地域での地形調査や地質調査、

植生調査などのサポート業務も行っている。

II-2 山岳会の特性

国内有数の山岳県である長野県には、6支部41加盟団体により成り立つ「長野県山岳協会」がある。その中で長野県伊那地域には伊那支部があり、そこには伊那山の会、駒峰山岳会、飯田山岳会という3つの山岳会が存在する。伊那支部独自の活動として、合同の登山教室を年4回開催するなど、会の垣根を越えた交流も積極的に行われている。ここでは3つの山岳会の特性について、各組織の成立契機や代表的な活動内容に着目しつつ説明する（第1表）。

1) 伊那山の会

伊那山の会は、里山からヒマラヤまでという会の精神、設立主旨に基づいて1958年に三峰山岳会として発足した。その後、国民体育大会誘致の流れを受けて1965年には三峰山岳会と伊那山岳会が合併し、伊那山の会となった。伊那山の会は現在、伊那市体育協会の山岳部として位置付けられている。現在の会員数は26名であり、会友（退会して

第1表 長野県山岳協会 伊那支部山岳会の特性

組織名	伊那山の会	駒峰山岳会	飯田山岳会
活動期間	1965年～	1955年～	1962年～
会員数	26名	17名	24名
設立契機	三峰山岳会と伊那山岳会の合併	駒ヶ根有志と赤穂高等学校山岳部員など	飯田山岳クラブと旧飯田山岳会の合流
代表的な活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・郡下中学校集団登山指導 ・救助隊・補導員（中央アルプス遭難対策協議会） ・自然保護指導員（高山植物等対策協議会） ・登山隊への隊員派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ・長野県山岳連盟の海外遠征への参加 ・駒峰ヒュッテの運営管理 ・国内外の山へのクライミング 	<ul style="list-style-type: none"> ・未踏のルートの開拓や地域研究 ・カラコルム・ガラクン峰の初登頂 ・市民登山やクライミング教室

（聞き取り調査、駒峰山岳会Webページ、長野県山岳協会（2011）より作成）

いるが会費を納めている)を含めると約40名である。かつては隣接する南箕輪村にある信州大学農学部の学生が入会することもあった。同会の5代目会長が長野県山岳協会会長であった縁もあり、年に八ヶ岳等で数回行われる合宿が、長野県山岳協会との合同で実施されている。

伊那山の会の代表的な活動としては次の2つが挙げられる。一つ目は「長衛祭」である。長衛祭は南アルプス北部の登山道整備などに尽力した竹沢長衛を偲ぶもので、1958年から実施されている。かつては周辺のいくつかの山岳会で運営されていたが、1965年からは伊那山の会による運営に統一された。その後、旧長谷村から村おこしの行事として長衛祭を実施したいという要望を受け、協賛という形態で関与することとなった。旧長谷村が2006年に伊那市と合併した後は、主催団体である伊那市実行委員会を支援している。また、長衛祭の2日目に行われる仙丈ヶ岳や甲斐駒ヶ岳への記念登山では、伊那山の会会員がガイドを務めている。

二つ目は伊那市民向けの「市民登山」の企画・運営・実施である。市民登山は、伊那市の体育祭という名目で1966年より始まった。現在ではガイドを含めた参加者が20名ほどであるが、多い時には50名以上で実施したこともある。基本的には山小屋泊を含む1泊2日の日程であるが、記念行事の際は2泊3日とすることもある。2015年は福井県の荒島岳という家族連れでも比較的登りやすい山が選定されたように、参加者層の意向を考慮した内容となっている。

その他の活動としては「西駒こまくさ会」の活動が挙げられる。西駒こまくさ会は伊那市長が会長を務め、副会長が伊那山の会の会長で組織されている。同会、毎年9月に「西駒んボッカ」を実施している。当イベントはトレイルランニングの大会であり、当初は西駒山荘の建て替えに協力するために、参加者が建材(レンガ)を背負ってゴールを目指す登山競争であった⁶⁾。伊那山の会は当イベントの支援を行っていたが、先述の市民登山が同時期に行われるため、現在では一部の会員が

関与しているにすぎない。また、中央アルプス地区遭難対策協議会・救助隊もしくは相談員として山岳遭難防止活動を行っている。救助隊では、当会会員が、隊長や副隊長、班長など幹部を多数歴任し活動の中核をなすとともに、中央アルプスや南アルプスにおける高山植物等保護対策協議会の自然保護指導員として自然保護活動を行っている。

2) 駒峰山岳会

駒峰山岳会は「登山を通して会員の資質・技術の向上を目的とし、熱意をもってこれに賛同する者を会員とする」という会の精神・設立主旨のもと、地元の山の愛好家や赤穂高等学校山岳部員など19名によって1955年に発足した。活動は基本的に個人による山行であり、各々が山を楽しむ事を大切に、それぞれの分野での技術向上を図ってきた。年に数回開催される合宿では様々な形態の登山が計画されている。また、発足以来、地元である中央アルプスでの活動を中心に登山活動を行うとともに山岳遭難救助を行ってきた。しかし、1962年11月に北アルプスで起きた二重遭難事故をきっかけに表面化した民間救助隊員の補償問題や、山岳会本来の活動に重点を移すことに基づいて、遭難対策協議会の活動からは退いている。(長野県山岳協会、2011)

特徴的な活動としては「空木駒峰ヒュッテ」の運営管理が挙げられる。この山小屋設立以前は、宝剣岳以南には避難小屋として空木平に岩室があるのみであった。戦後登山ブーム⁷⁾で桂木場登山口や北御所登山口より木曾駒ヶ岳と宝剣岳の山頂付近で一泊し、そこから空木岳へ至る縦走者が増えた結果遭難事故が多発したが、その際宝剣岳から空木岳を経由し菅の台に下山するまで途中で避難小屋や水場がないことが問題視された。行政には空木岳付近に避難小屋を整備する余裕がなく、当時の同山岳会の会員が避難小屋を1969年に完成させた。以来、このヒュッテは避難小屋として遭難防止に貢献している。同山岳会の会員はヒュッテの開設期間である毎年7月中旬から10月中旬まで交代で小屋番をしている。

駒峰山岳会会員は高所登山の実績も数多く残している。1964年ヒマラヤ遠征隊によるギャチュン・カンの初登頂、1965年ニュージーランド遠征隊のクック峰登頂などの長野県山岳連盟の海外遠征への参加を行うとともに、国内での登攀ルートの開拓などを行ってきた。

3) 飯田山岳会

飯田山岳会は、複数の社会人山岳会が合流して組織された飯田山岳クラブと、飯田高校山岳部OBが中心となり活動していた旧飯田山岳会とが1968年に合流して結成された。

2018年5月現在、会員数24名である。活動としては、山岳会の合宿、例会山行、講習会などに加え、会員個人の山行が長野県内を中心に積極的に行われている。2017年度の実績では、合宿は春合宿、新人合宿、クライミング合宿、冬合宿と4回、例会山行は3月、4月、9月に計3回行われた。その他に、雪山講習としてビーコン⁸⁾操作講習会なども行なっている。会員の個人山行も積極的で、年間50日以上山行日数の会員が2名いる。

在籍する会員の中で信州山案内人の有資格者は1名、日本山岳協会の公認山岳指導員有資格者は2名いる。後者の2名は山岳指導員センターの講習会などで講師を務めている。登山者の指導的立場の会員が複数名在籍し、後継の指導にあたっている。その他、山岳会の活動として、積極的な海外登山、市民登山活動、自然保護活動の三つがある。

海外登山では数多くの実績を残しており、1976年の未踏峰ガンクン峰(6620m)に初登頂後、1981年には山岳会会員2名を隊員として送り出した長野県山岳協会カラコルム登山隊がガッシャーブルム1峰に登頂している。また翌年にはインドヒマラヤのタラ・バハール(6227m)への遠征隊を送り出し登頂している。1991年には山岳会創立30周年記念事業としたムスターグ・アタ峰(7546m)登山で2名の会員が登頂を果たした。その後は、個人山行中心であるが、カラコルムやヨーロッパアルプス、韓国仁寿峰、カナダなど世

界の多くの地域で登山を行なっている。

市民登山活動は、会員と市民の交流、市民に自然と親しんでもらう目的で創立期から行われている。一般市民から参加者を公募し、実費のみの負担で参加できる登山イベントであった。1986年は槍ヶ岳、1987年は北岳が目的地で、多い年では40～50名もの参加があった。しかし、市民登山活動は1997年までで、現在は行われていない。一方、2010年からは、体の不自由な小学生を会員が背負って登山遠足をサポートするボランティア活動が3回行なわれた。

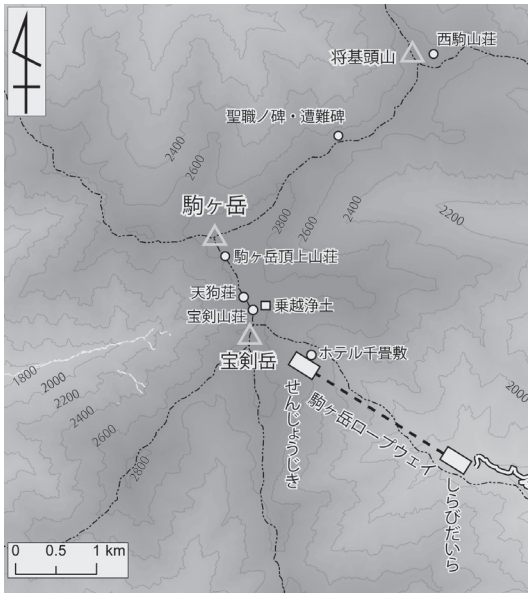
自然保護活動は、1973年に大平宿周辺の環境破壊への危惧から、県の自然園事業の話が持ち上がり、会員主導のもと「摺古木と大平を守る会」を開催し多くの市民および山岳関係者の賛同者を得た。この運動は「大平をのこす会」と発展的に改称され今日の自然保護活動にまで繋がっている。

III 中央アルプスにおけるアクターの山岳観光への取り組み

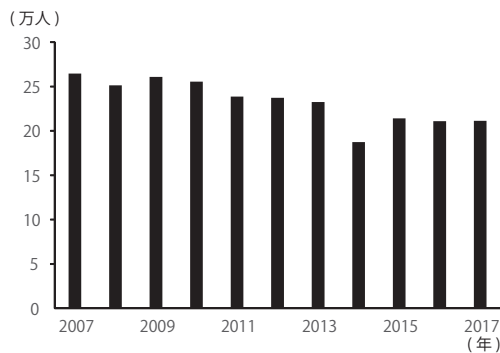
III-1 観光協会・観光業者の取り組み

1) 中央アルプス観光株式会社

中央アルプス観光株式会社はしらび平駅～千畳敷駅間の「駒ヶ岳ロープウェイ」やJR駒ヶ根駅～しらび平駅間の路線バス、千畳敷駅近くの「ホテル千畳敷」の運営を行っている(第3図)。主要事業の一つである「駒ヶ岳ロープウェイ」は1967年に運行を開始した日本で初めて高山にかけられた山岳ロープウェイである。ロープウェイの設置により、誰もが標高2612mの高山地帯、千畳敷カールまで足を踏み入れられるようになった。その結果、木曾駒ヶ岳には各地から登山を目的としてだけでなく、高山地帯の散策が周遊観光ルートの一部として組み込まれるようになり、多くの観光客が訪れるようになった。2007年以降の駒ヶ岳ロープウェイ利用者数の推移をみると、毎年20万人以上が利用していることが分かる(第4図)。路線バス利用者数も同様に推移している。日本で最も高い場所に立つホテル、「ホテル千畳敷」に



第3図 観光アクター運営施設の分布
(昭文社 山と高原地図2018年度版より作成)



第4図 駒ヶ岳ロープウェイ利用者数の推移
(中央アルプス観光株式会社提供資料より作成)

関しても多少の増減はみられるものの、年々宿泊者数は増加している。

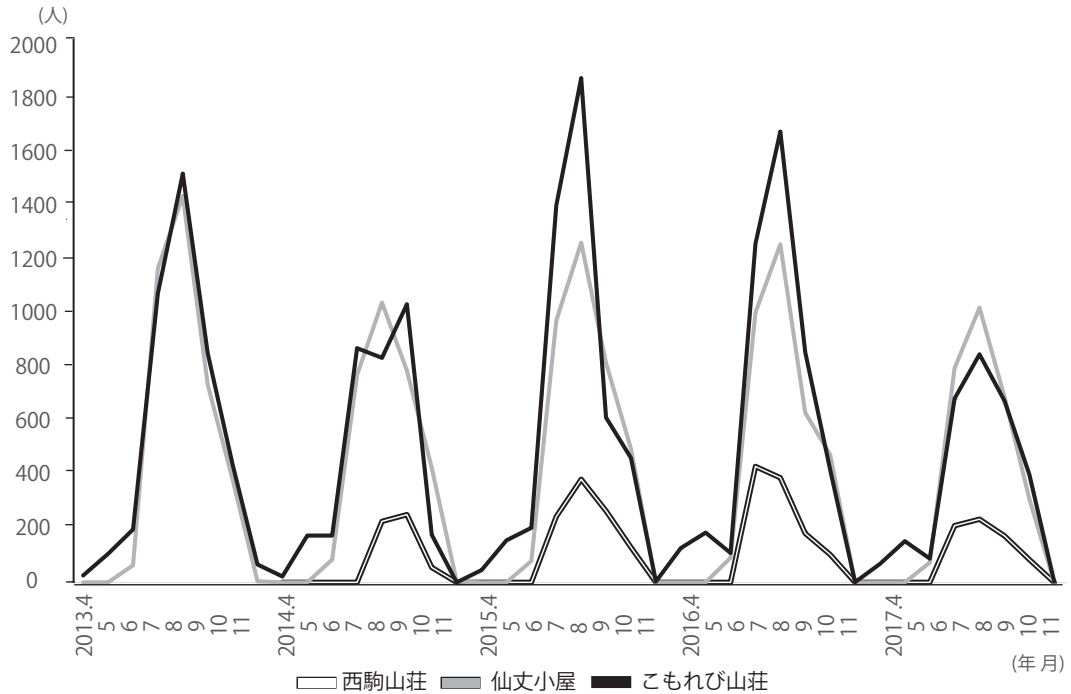
ロープウェイで訪れることのできる千畳敷の観光シーズンは、7月～10月の無雪期と11月～6月の積雪期に分けられる。無雪期の観光形態としては高山植物の観察や登山などが挙げられ、同社ではその時期に「夏の千畳敷カール2612体験」と題したイベントを企画している。「千畳敷FLOWER MAPツアー」は高山植物の宝庫である千畳敷カールの中の歩道をスタッフの解説を聞きながら一周

するイベントであり、高山植物グッズのプレゼントもある。また、「初めての方も、久しぶりの方も！女性限定日帰りトレッキングツアー」は、千畳敷カール内から稜線が展望できる「乗越浄土」までを山岳ガイドの解説付きで登る。2016年には3回実施され、県外からの参加者が約3割、40～50代が全体の6割であった。また、子供向けのツアーとして「小学生向け夏休み応援企画！2612自由研究ツアー」がある。このツアーは実験を通して標高差によって生じる気圧の違いを体験したり、植生の移り変わりを観察することを通して自由研究の一助になることを目的としている。平地と山の気圧差や高山の植生など普段あまり触れることのない事象を理解でき、地域在住の子供たちが山岳地域に興味を持つきっかけにもなり得ると考えられる。こうした様々なイベントを県内外の観光客だけでなく、地域住民にむけて提供することにより、観光客を惹きつけるだけでなく、登山ガイドの活動の場を提供しているといえる。

積雪期である4月下旬から5月下旬にかけて、同社は「千畳敷スキー場」を経営している。カールの一部をゲレンデとして、1971年からTバーリフトが設置されている。Tバーリフトはコンクリートの基礎や杭が不要で景観や自然環境を損なう恐れが少ない。さらにリフトより上のスキー場外がバックカントリースキー⁹⁾の滑走エリアとなる。このように滑走コースにバリエーションを設けることで、スキー客の満足度を向上させている。同時に、各種レンタル用品を取り揃えることで様々な層のニーズに対応するなどの取り組みを行い、スノースポーツの場としても千畳敷スキー場を活用している。

2) 伊那市観光株式会社

伊那市観光株式会社は、中央アルプス山域では「西駒山荘」、南アルプス山域では「仙丈小屋」や「北沢峠 こもれび山荘」、「塩見小屋」の施設経営をしている(第5図)。同社の山荘経営については、民間企業が経営母体の北アルプス山域の山荘とは異なり、建物の所有者は伊那市であり市が



第5図 伊那市観光株式会社運営の山荘利用者数

注) 西駒山荘は2013年度改装の為、休業

(伊那市観光株式会社提供資料より作成)

管理者を雇用しているという点が特徴として挙げられる。従業員は原則として一年おきの雇用契約の更新ではあるが、同じ従業員が数年間続ける場合が多い。また、開設期間も伊那市山荘条例により規定されている¹⁰⁾。

西駒山荘は、宿泊・休憩ために利用される期間以外は近くにある岩室とともに避難小屋として冬季も開放されている。これには、先述した西駒山荘の前身は岩室であるという成り立ちが大きく関係している。1913年の遭難事故を機に山麓の集落の有志が中心となり岩室が建設され、その後は信州大学農学部にある中原寮の学生が交代で小屋番をしていた時代もあり、事故の教訓を生かし、地域の住民を中心に維持管理されてきたといえる。

既述の「西駒山ボッカ」の立案は、小屋番である管理人に任されており、会社がサポートする形態である。また、上伊那地域の中学校の行事である木曾駒ヶ岳への集団登山についてみると、現在

は年3～4校の利用があるにすぎない。学校ごとに南信州ガイド協会派遣のガイドが同行している。しかし、西駒山荘の位置が主要ルートである、駒ヶ岳ロープウェイ経由での木曾駒ヶ岳登頂から外れているために利用は低調である。これは、事故のリスク軽減のためにロープウェイを利用した日帰り登山が望まれていることによる。また、西駒山荘の収容人数が40人で、大人数の対応ができないことも影響している。ただし、2014年に生じた御嶽山噴火の影響で、木曾地域の中学校の利用が近年みられるようになっている。

西駒山荘の役割として、宿泊や休憩、冬季の避難小屋の他に登山道の整備がある。山小屋が独自に実施する場合、市町村側から補助金が出る場合もあるが、同社では管理人の雇用契約の中に登山道整備が規定されており、委託費を用いて適宜整備を実施する方式を採用している。このようにイベント企画や登山道整備など管理人の裁量による

部分が大きく、それを同社がサポートする体制がみられる。この点が他山域の山荘経営と大きく異なる特徴といえる。

3) 駒ヶ根観光協会

駒ヶ根観光協会は、伊那谷エリアの一大観光スポット「千畳敷カール」を抱える宝剣岳の麓に事務所を構えており、駒ヶ根市の観光企画立案及び情報提供を行なっている一般社団法人である。

観光企画の中には、一般者を対象にした登山企画があり、そのうち本格的な登山企画では南信州ガイド協会にガイド業務を委託している。駒ヶ根観光協会のイベントでは、ガイド業務を媒介として南信州ガイド協会と協力関係があり、この点が駒ヶ根観光協会の特徴である。具体的な活動としては、駒ヶ根市のジオパーク推進室と協力して、ジオパーク推進の登山イベントとして、木曾駒ヶ岳から空木岳への縦走や、木曾駒ヶ岳への登山を行っている。また、ゴールデンウィークに「残雪期雪山登山教室」を2016年から三年連続で実施している。夏季以降は、第2表の通り複数の登山ツアーを開催し、いずれも南信州ガイド協会所属が

第2表 駒ヶ根観光協会主催の年間登山イベントスケジュール (2018年)

開催月日	開催内容	ガイド同行の有無
7月22日	「信州山の日」 山岳写真家 津野祐治と撮る中央アルプス 山岳写真講座	無
8月3日	夏休み特別講座 もっと知ろう！中央アルプスの昆虫・蝶・鳥	無
8月11日	「国民の祝日 山の日」中央アルプス松尾岳縦走ツアー	有
8月25日 ~26日	信州山案内人行く！ 憧れの日本アルプスモデルツアー(木曾駒ヶ岳縦走コース)	有
10月20日	中央アルプスウェストン祭前夜祭 山と溪谷社 萩原浩司 & 鈴木ともこトークショー	無
9月上旬	鈴木ともこさん 中央アルプス山ツアー	無
9月上旬	中央アルプス 雲上の囲碁大会	無
10月21日	中央アルプスウェストン祭 記念式典&登山	有
10月27日	伊南三座巡りその① 富田高原伊勢滝ウォーク	有
2019.2月	スノーシューレッキングツアー	有

(駒ヶ根観光協会提供資料より作成)

イドが随行している。また、駒ヶ根観光協会では、中央アルプス遭難対策協議会と共同で情報発信を行っており、遭難防止に力を入れている。一方、山岳写真ツアー、生き物観察ツアー、トークショーなど、登山以外のイベントも行っている。

これらの主催ツアーの宣伝としては、アンテナショップ銀座NAGANOにチラシ等を置く他、ホームページやソーシャルネットワークによる情報発信に力を入れている。イベント参加者は、県内外さまざまであるが、中央アルプスの低山への登山企画では県内の参加者が多くなる。現在、駒ヶ根観光協会は、Ⅲ-2で後述する「南信州アウトドア協議会」の一員であり、登山のみならず、複数のアウトドア事業者と協力関係を拡げ、駒ヶ根の持つ自然環境を活かしたイベントの企画に取り組んでいる。

観光協会は、事務所に近接する「森と水のアウトドア体験広場」にあるクライミングウォール¹¹⁾の管理業務を、市から指定管理者として委託されている。この人工壁は高さ10m以上あり、10歳以上の経験者は誰でも利用できる。観光協会によると、2002年7月から設置されており、国際大会の規定では高さが不足するものの、国内の大会では利用されている。南信州ガイド協会がイベントでクライミングウォールを利用することはないが、中央アルプス地区遭難対策協議会で、安全講習などを行った実績がある。

4) 宮田観光開発株式会社

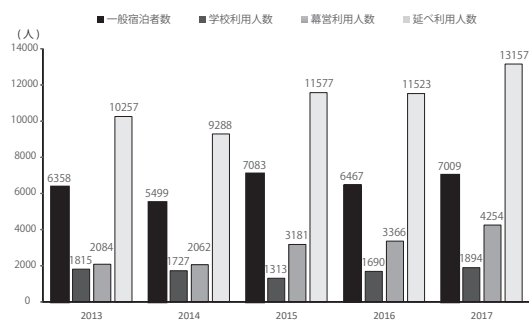
宮田観光開発株式会社(以下、宮田観光)は、宝剣岳の近隣で宝剣山荘と天狗荘、木曾駒ヶ岳で頂上山荘の運営を行っている。宮田観光ではガイド登山ツアーの企画や主催はしていない。一方、運営している山小屋を通して、夏季の学校登山が恒例となっている、伊那と木曾地域の学校登山を受け入れている。

学校登山の受け入れは、宿泊利用で年13-14校に達する。収容最大人数は、宝剣山荘120名、天狗荘200名、頂上山荘90名となっている。ただし、大規模な学校では、参加人数が一校300名近くに

なるため、宝剣山荘と天狗荘とに分かれての宿泊となる。日帰り登山の場合にも休憩場所として利用されるが、それも含めるとかなりの受け入れ数になり、学校登山の際には不可欠な避難場所としての役割も担っている。また、南信州ガイド協会が受けている学校登山25校のうち、約半数がこれらの山小屋を利用している。

これらの山小屋は、一般登山者にとっても安全管理上重要な役割を持つ。学校登山以外に、県外からなど旅行社を介して訪れる利用客は年間1300名程である。近年では旅行会社を通さずに利用する個人客が増える傾向にある。山小屋利用者数は、2014年の夏山登山期の悪天候による減少があるものの、横ばいもしくは微増となっている(第6図)。また、最近5年間にみられる新しい傾向として、テント利用の幕営者が増加していることが挙げられる。宮田観光によると、個人の登山客が増えていることがその背景であると考えられる。実際、頂上山荘のテント場では、個人のテント利用者が増えているために、テントサイトの数が不足という問題が発生している。

また近年は、韓国などを中心に外国人客が徐々に増えてきている。ただし、中央アルプスでは2013年に韓国ツアー登山客が4人亡くなる遭難事故が起こっており、外国人登山客の安全管理なども問題となっている。それゆえ、今後宮田観光運営の山小屋では、リスクを考慮した外国人ツ



第6図 宝剣・天狗・頂上山荘の5年間の宿泊客数推移

(宮田観光株式会社提供資料より作成)

アー客の受け入れ体制を構築していく必要性があると考えている。

Ⅲ-2 南信州アウトドア協議会

2017年度、20社を超える企業や団体、個人が発起人となり「南信州アウトドア協議会」が発足した。長野県の南部（諏訪以南）地域でアウトドア産業に携わる企業や団体および個人が、情報交換や各々の抱えている問題・課題を相互に共有し解決策の検討をしていく中で協議やイベントを共同開催ができないかという機運が高まるなかでできた組織である。本協会の発足の背景には、長野県南部の中央アルプスと南アルプスの2大アルプス、個別の著名山頂（御嶽山、乗鞍岳、木曾駒ヶ岳）、八ヶ岳等を含む山岳、天竜川や木曾川の主要一級河川等といったアウトドア産業の舞台としての自然環境に加え、温泉施設も豊富な点がある。また、中京および関東圏、関西圏から近い位置にあり、観光産業の潜在性は高い。しかし、この地域にはアウトドア産業に関わる企業が多くあるものの、相互の連携が少なかった。そこでアウトドア産業に関わる企業の相互連携を通じて、観光客の滞在時間を長くし宿泊へと促そうとする企図があった。このように地域と連携し、新たな観光形態の開発を行うことで地域の活性化に寄与することを目指している。

本協議会においては、アウトドアアクティビティごとに11の事業部を置いている。協議会は、各事業部の運営サポートと各事業部間の連携を促進させ、地域と連動した事業、自治体や関連団体との連携促進事業、自主事業の運営、新規事業の運営開発、リスクマネジメント事業等を主な事業として実施している。事業部は山岳部門、ウォータースポーツ、サイクリング、ウィンタースポーツ、キャンプ、トレイルランニング、フィッシング、森林、農業、フード、イベント設営・施設建設で構成されており、幅広いアウトドアアクティビティに対応できる組織体系となっている。

発足から1年後の2018年5月には、協議会の主催で「SNOO アウトドアフェスティバル」が開

催された。駒ヶ根高原家族旅行村において、2日間にわたりアウトドアショップやフィッシング関連メーカー、キャンプ用品メーカーのブースの展示だけでなく、SUPやマウンテンバイク、ツリークライミングの体験コーナー等も設けられた。このように、家族連れが多く来客するイベントを開催する（写真2）など、協議会は発足から1年で急速に活動の幅を広げている。

南信州アウトドア協議会の山岳部門事業部については、南信州山岳ガイド協会会員だけでなく中央アルプス遭難対策協議会会員、山小屋関係者、アウトドアショップ店員などが所属し、相互に連携をはかっている。以下では、山岳部門事業部の活動に着目し、地域在住の登山ガイドによる今後の活動可能性について、協議会会員による2件の活動事例に基づいて説明する。

1) アウトドアショップK

本ショップの代表は協議会の代表を務めており、南信州アウトドア協議会の事務局もここに置かれている。店舗のうち駒ヶ根スポーツ館では、登山、ロッククライミング、バックカントリースキー、トレイルランニング用品等の販売が主体であるが、店内にはクライミングウォールも併設しており、クライミングやボルダリング¹²⁾の体験を行うこともできる。

本ショップでは、様々なイベントが企画・開催されている（第3表）。登山関連のイベントとし



写真2 SNOOアウトドアフェスティバルの様子
(2018年5月 松村撮影)

ては、中央アルプス縦走ツアー、夏山では中央アルプスだけでなく北アルプスや南アルプスのツ

第3表 アウトドアショップKの年間イベントスケジュール（2018年～2019年）

期間	体験内容
通年	屋内スラックライン体験
通年	屋内クライミング・ボルダリング体験
4月～11月	屋外人工壁クライミング体験
1月～3月	近場でスノーシュー体験in駒ヶ根高原
1月～4月	中央アルプス千畳敷スノーシュー体験ツアー
1月～4月	スノーシューツアー 上高地・柵池・霧ヶ峰
8月11日	南木曾岳ツアー(女性限定企画)
8月12日	屋外人工壁クライミング体験講習会
8月13日	屋外人工壁クライミング体験講習会
8月25日～26日	中央アルプス:千畳敷から空木岳縦走ツアー(小屋泊まり:1泊2日)
9月1日～3日	南アルプス:塩見岳ツアー(小屋泊まり:2泊3日)
9月9日	北アルプス秋の焼岳ツアー(日帰り)
10月16日・17日	上高地日帰り紅葉ツアー
10月20日	美ヶ高原:紅葉ツアー
10月21日	屋外人工壁クライミング体験講習会
10月27日	中央アルプス南木曾岳ツアー
10月28日	景色最高!京ヶ倉:生坂村日帰りツアー
11月17日	登山教室 地図コンパス講習(日帰り)
11月18日	少しの岩場パリエーションを楽しむ「中央アルプス:烏帽子岳」
11月、12月、1月の毎週木曜日	登山教室 地図コンパス講習:座学1・2
12月2日	登山教室 地図コンパス講習(日帰り)
12月15日・16日	木曾駒ヶ岳スノートレッキングツアー
12月22日	登山教室 地図コンパス講習(日帰り)
2019年1月12日～13日	中央アルプス 千畳敷 雪山講習(1泊2日)
1月26日～27日	上高地スノーシューツアー(1泊2日)
2月3日	北横岳スノートレッキングツアー
2月9日～10日	中央アルプス 千畳敷 雪山講習(1泊2日)
2月10日	富士見台スノートレッキングツアー(日帰り)
2月16日～17日	上高地スノーシューツアー(1泊2日)
2月23日～24日	白馬柵池スノーシューツアー(1泊2日)

(アウトドアショップK提供資料より作成)

アーを中心とし、冬には雪山講習、スノーシューツアーなどの雪山初中級者向けの企画もある。地図コンパス講習といった座学もあり、年間を通じて登山者のレベルアップに寄与している。クライミング体験講習会はショップ併設のクライミングウォールを用いるだけでなく、既述の「森と水のアウトドア体験広場」内にある屋外人工壁を使用する場合もある。この施設は駒ヶ根市より駒ヶ根観光協会が指定管理業者として管理を委託されている設備である。自社所有の施設にとどまらず、市内の公的施設と連携した企画である点が特徴である。

これらの様々な企画において、参加者の募集やイベント運営はアウトドアショップKが行っている。ただし、講師や現地案内は、南信州山岳ガイド協会所属のガイドや信州山案内のガイドなど資格保有者に委託されている。つまり、ショップ企画のイベントは、上伊那地域在住のガイドに仕事の場を提供する役割も担っているといえる。

2) アスタルプロジェクト

「一般社団法人アスタルプロジェクト」は、南信州アウトドア協議会の正会員として、中央アルプスを中心として伊那谷の活性化に取り組んでいる。山岳観光に関係するものとして、本団体は伊那谷の魅力共有するために、地域住民がカヌー、サップボード、シャワークライミングなどを体験できるイベント「アスタルYAMA.FES」を毎年7月に開催している。

また、より重要であるのは登山口までのアクセス開発に、活性化と関連づけて取り組んでいる点である。本団体は伊那市に本社をもつ有限会社白川タクシーに依頼し、2018年の夏期より南アルプスへの林道バスの直通交通を導入した。また、中央アルプスの登山口の一つである桂木場への直通交通も運行し、結果的に伊那市駅前から2つのアルプス登山口へと登山者を直接運ぶ交通網を新たに作りだした。本団体は2017年に南アルプスへの林道バスに対して早朝運行需要交通を把握するために、南アルプス仙流荘行きルートの無料運行

を実施した。その際のアンケートにより、有料での継続実施を希望する意見が多いこと、利用者の93%が県外からの登山者であることが把握された。加えて全利用者の63%が伊那市内のホテルに宿泊しており、直通運行による伊那市街地への波及効果もあることが確認された。2017年の運行は7月15日から10月8日までの土曜日と祝日前の日曜日であり、混雑期の7月31日から8月12日までは毎日運行し、全期間内の利用者は32名、キャンセルを含めると39名の予約利用者であった。

このようにアスタルプロジェクトが、伊那市中心部と登山口の直通交通を確保することで、首都圏や中京圏から週末に訪問する登山者が伊那市に宿泊し、翌日の早朝直通バスで南アルプスの仙丈ヶ岳や中央アルプスの木曾駒ヶ岳の山頂を目指すことが可能となった。この取り組みにより南・中央アルプス登山者の伊那市中心市街地への前泊需要が生まれてきている。今後の登山者への周知により、首都圏や中京圏の登山者を伊那市へとさらに取り込むことで市街地の宿泊施設や飲食店をはじめ、御土産購入による経済効果が期待されている。また、林道バスの出発地である伊那市駅前が木曾駒ヶ岳や南アルプスへ向かう登山ツアーの集合場所として用いられることで首都圏の登山客と地元ガイドが繋がり、新たな山岳ゲートウェイとしての役割を担うことが期待される。

IV 登山ガイドと地域との関係

本章では登山ガイドの活動特性と地域住民との関わりについて、南信州山岳ガイド協会に所属する登山ガイドに実施した聞き取り調査の内容をもとに検討する。

IV-1 所属ガイドの特性

調査対象所属ガイドの29名の基本属性をまとめたものが第4表である。日本山岳ガイド協会所属ガイドは13名で、全員が登山ガイドステージIIであり、いずれも信州山案内人の資格も持ち合わせている。日本山岳ガイド協会の登山ガイドステー

第4表 南信州山岳ガイド協会所属ガイドの属性

番号	勤務形態	ガイド資格	所属山岳会	年齢	備考
1	ガイド専業	登山ガイド	伊那山仲間	60代	SNOO会員, 中ア遭会員
2		信州山案内人	無所属	40代	SNOO会員, 中ア遭会員
3		信州山案内人	無所属	40代	
4	会社勤務	信州山案内人	無所属	50代	SNOO会員, 中ア遭会員
5		登山ガイド	伊那山の会	50代	
6		登山ガイド	無所属	40代	
7		登山ガイド	駒峰山岳会	40代	
8		信州山案内人	無所属	60代	
9		登山ガイド	駒ヶ根	50代	
10		登山ガイド	駒峰山岳会	50代	
11		信州山案内人	駒峰山岳会	50代	
12		信州山案内人	駒峰山岳会	20代	
13	自営業	登山ガイド	駒ヶ根	70代	大工
14		登山ガイド	伊那山の会	70代	元中ア遭隊長
15		信州山案内人	駒峰山岳会	40代	
16		信州山案内人	無所属	70代	農家
17		信州山案内人	駒峰山岳会	60代	農家
18		信州山案内人	駒ヶ根	50代	
19	その他	登山ガイド	無所属	70代	中ア遭会員
20		信州山案内人	里山の会	80代	
21		登山ガイド	駒峰山岳会	60代	
22		登山ガイド	駒峰山岳会	70代	中ア遭会員
23		登山ガイド	駒峰山岳会	70代	
24		信州山案内人	駒峰山岳会	70代	
25		登山ガイド	駒峰山岳会	60代	
26		信州山案内人	駒峰山岳会	60代	
27		信州山案内人	飯田山岳会	60代	
28		信州山案内人	無所属	60代	
29		信州山案内人	駒ヶ根	60代	

注) SNOO…南信州アウトドア協議会 中ア遭…中央アルプス地区遭難防止対策協会

(南信州山岳ガイド協会提供資料より作成)

ジIIの職能範囲として、無積雪期は、全ての一般登山道と、積雪期は樹林帯までとなっている。その他の16名も、いずれも信州山案内人の有資格者であり、所属するガイド全員が日本山岳ガイド協会の登山ガイド資格、信州山案内人のいずれかの資格を有している。

専業として登山ガイド活動を行なっているものはわずか3名である。逆に、ほとんどは、定職に就く（会社勤務9名、自営業従事6名）かたわらにガイドをしている。これらは兼業であり、例えば大工（ガイド13）や農業（ガイド16,17）など、繁忙期と閑散期がある職業についている。その他11名が定年退職者となっている。

地域山岳会との関わりについては、29名のうち、12名が駒峰山岳会に所属しており最多となっている。その他は、駒ヶ根山岳会が4名、伊那山の会が2名、伊那山仲間、飯田山岳会、里山の会が各1名、無所属が8名である。つまり3分の2近くの会員が地域山岳会に所属しており、地域の登山者との繋がりも密接な協会といえる。ガイドの年齢に注目すると、60代が9名で最多で、次いで多い順に70代が7名、50代が6名、40代が5名となっており、地元山岳会の高齢化と同様に、ガイド協会においても所属ガイドの高年齢化が存続において課題となっている。

また、ガイドの居住地域は駒ヶ根市が9名で最多で、伊那市が6名、宮田村1名であり、出身地は概ね伊那谷地域に集中しており、地元のガイドが地元の山を案内するという活動形態になっている。そのほか、下伊那郡松川町3名、中川村が3名、飯田市が2名、木曾郡王滝村、同木祖村が各1名、南箕輪村、飯島町が各1名。唯一県外者として奈良県香芝市のガイドが1名いる。

全体の特徴としては、大都市圏に存在する、様々なバックグラウンドを持つガイドが集まる所属人数50名以上の山岳ガイド団体と異なっている。すなわち、地元の山岳会に所属しながら、地元の山を長年案内するガイドが集まる組織としての性格をもつ。その意味では、中央アルプスを含めた地元の山に詳しいガイドが集まっていると言えよう。

IV-2 ガイドの活動内容

1) 学校登山・市民登山

長野県上伊那地域の学校登山は明治30年代に始まったとされる。日本アルプスへの近代登山の関心の高まりや、日清、日露戦争による国の体育重視の方針が背景にあった。この長い歴史をもつ学校登山においては、既述したような1913年（大正2年）の遭難事故が発生した。しかし、その後も現在まで90年以上、学校登山は継続して実施されている。

このように、長年継続してきた中学校の夏の集団登山を支えてきたのが山案内人であり、登山ガイドである。1913年の遭難事故の発生要因の一つとして、ガイドや案内人の不在が指摘されてきた。その教訓を活かし、現在では上伊那・下伊那・木曾地区で実施される学校登山においては、登山ガイドが帯同し、安全管理が徹底されている。

南信州山岳ガイド協会は、2017年の実績で、上伊那・下伊那・木曾地区の中学2年の学校登山のガイド業務を25校請け負っている¹³⁾。また、県外の学校については、日帰り登山を中心に、東京都内や隣接県等の中学、高校登山のガイド業務を請け負っている¹⁴⁾。2017年の県外中学校の学校登山受け入れ校数は2校であった。

日程についてみると、7月17日から10日間に21校が集中した（2017年）。日帰り登山で生徒数規模が6人や30人など少人数の場合には、ガイドは少人数ですむ。一方、人数規模が大きい学校で、宝剣山荘、天狗荘、頂上山荘などに宿泊する場合には、ガイドも大人数が必要となる。

学校登山の対象山域としては中央アルプスの木曾駒ヶ岳が25校と大半を占める。その他は、南アルプスの仙丈ヶ岳、上伊那郡中川村の陣馬形山がそれぞれ1校であった。木曾駒ヶ岳の学校登山ルートとしては、北御所登山口より山頂に向かい山頂付近の山小屋へ宿泊し翌日にロープウェイにて下山する北御所ルートが最も多い（9校）。続いて、登り下り両方にロープウェイを利用し、山頂駅から駒ヶ岳山頂への往復ルートを行く日帰り登山が7校ある。その他、登りにロープウェイを用い、山頂付近の山小屋へ宿泊した後に桂木場

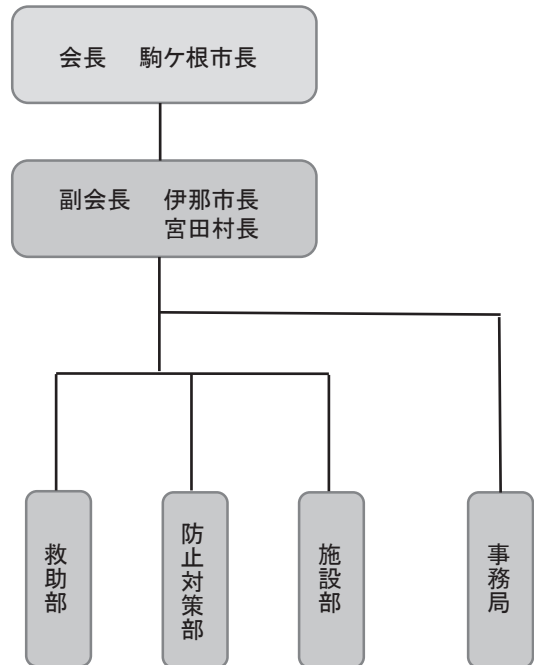
登山口へと下山するルート（2校）、ロープウェイを使用せず、北御所登山口より山頂を経て桂木場登山口へ下山する縦走登山ルートを採用する例（1校）もある。

学校によっては、保護者や山岳医が帯同する。しかし、近年一般には、父兄と教員が学校登山への参加に二の足を踏むなどの問題を抱えている。このような現状において、学校登山が長年継続できたのは、地元に着した登山ガイド組織のメンバーが各々協力し支えてきた点が大きく貢献しているといえる。

2) 遭難対策協議会及び山岳指導

中央アルプス地区山岳遭難防止対策協会（以下、中ア遭対協）は、会長に駒ヶ根市長を置き、副会長の伊那市市長と宮田村長を責任者として組織されている。本会は中央アルプス地区における遭難の未然防止及び遭難者の捜索、救助の万全を期するために関係市町村機関及び、団体等が協力し、総合的な遭難対策を樹立し、これを推進するものである。1955年に発足して以来、60年以上中央アルプスにおいて事故防止、救助活動に取り組んできた。組織は、運営を行う事務局、警察署とともに遭難者の捜索、救助活動を行う救助部、気象情報の伝達、登山客からの相談等を受ける防止対策部、施設整備を行う施設部の4つの部署で構成されている（第7図）。2017年12月には、新たな取り組みとして防止対策部が山岳の気象や登山道の状況などを随時発信するために「フェイスブック」の公式ページを開設し、中央アルプスの最新山岳情報を登山者に向けて提供するなど、様々な活動を行っている。

中ア遭対協会員には南信州山岳ガイド協会所属ガイドも在籍している。救助部の救助隊員としての役割だけでなく、防止対策部の山岳相談員として登山者への装備や登山道の状況の助言を行うなど、山岳遭難を未然に防ぐ役割も担っている。所属ガイドの中には元救助隊長として活躍したメンバーも在籍しており、中ア遭対協とガイド協会は強い協力体制を構築してきているといえる。



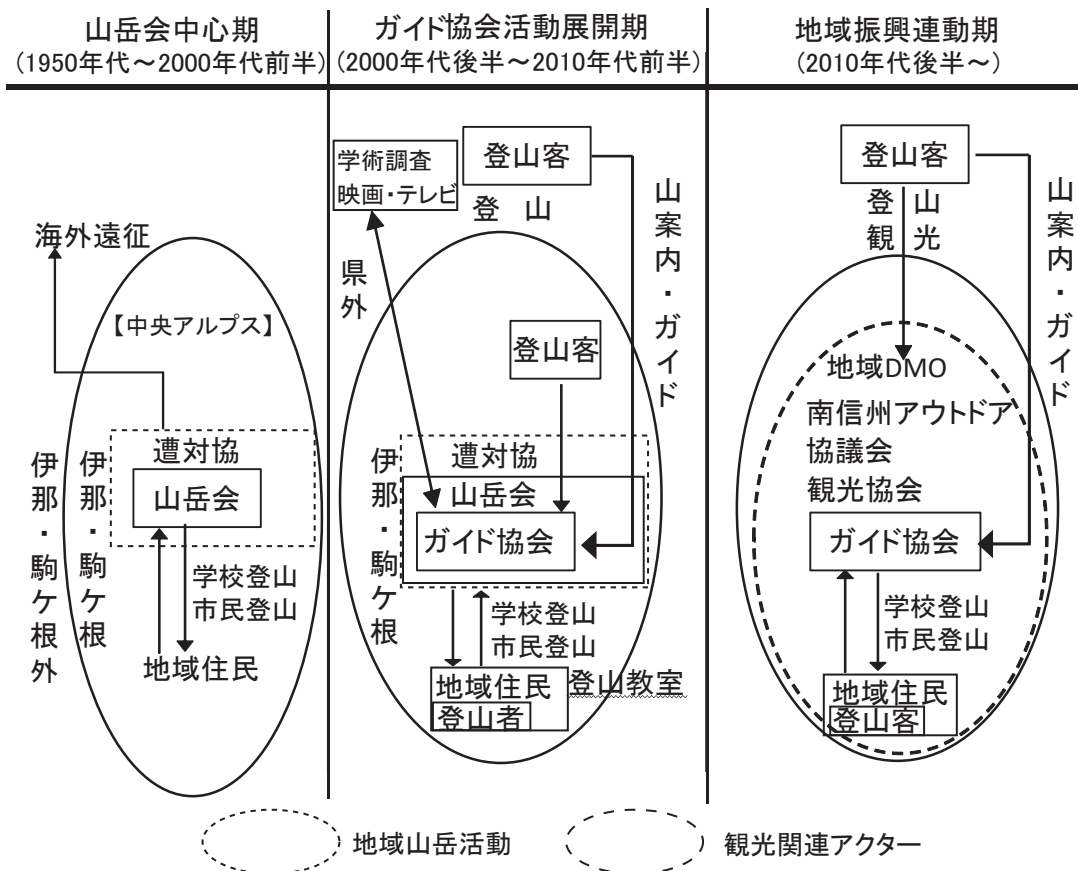
第7図 中央アルプス地区山岳遭難防止対策協会の組織図

（中央アルプス地区山岳遭難防止対策協会
（2012）より作成）

3) 地域社会との関わり

伊那市・駒ヶ根市における登山ガイド活動の展開は、山岳会が中心となって山案内を行っていた山岳会中心期と、南信州山岳ガイド協会設立後のガイド活動展開期、地域振興運動期の3つに区分して説明することができる（第8図）。

日本の登山ガイドの公的資格認定機関として1971年に公益社団法人日本山岳ガイド協会が設立された。この当時、伊那・駒ヶ根地域では、ガイド組織である南信州山岳ガイド協会が設立されておらず、信州山案内人として活躍していた登山ガイドと地域住民は、山岳会を通して中ア遭対協や市民登山、学校登山で関係を有しており（山岳会中心期）、活動の範囲や発信等は限定的であった。伊那山の会、駒峰山岳会、飯田山岳会それぞれが、市民登山や学校登山に参画するなどの取り組みがあったものの、基本的には山岳会として海外遠征や会としての技術向上、知識伝播が活動の中心で



第8図 中央アルプスにおける登山ガイド活動の地域的展開

(聞き取り調査より作成)

であった。それに対して、ガイド活動は、特定の会員によって担われ、ボランティアの性格が強いものであった。

しかし、日本山岳ガイド協会が資格認定制度を構築し、認定登山ガイドが生まれると、伊那・駒ヶ根地域に、この地域の登山ガイドをまとめる南信州山岳ガイド協会が発足した。その後のガイド活動展開期においては、各山岳会の活動にとどまらず、専業と兼業の違いはあれどもガイドとして有料で登山客を山に案内する活動、すなわち業務が成立してきた。従来からの中学校登山のサポートはもちろん、山岳会がその役割を担っていた地域住民への登山機会の創出という面でも、協会独自に登山教室を企画・運営をするなど新しい活動が行われてきた。また、首都圏や中京圏に本社を持

つ旅行会社と連携し、伊那・駒ヶ根市以外の県外の登山者をパッケージツアーの枠組みで中央アルプスや南アルプスにおいてガイド活動を行うようになった。登山者の安全管理を行いながらツアーのガイドをするにとどまらず、山岳地域の歴史や高山植物について観光客や登山客、地域住民に解説するネイチャーガイド、もしくはインタープリターとしての機能も有するようになった。さらに、山岳地域での地形・地質調査等のサポート業務、山岳域での映画やテレビ撮影におけるポーター（荷物運び）業務など、活動の幅は広がってきている。

現在に至る地域振興連動期においては、各山岳会との繋がりはあるものの、ガイド協会単独での活動が中心となってきた。観光協会や南信州アウ

トドア協議会との連携、地域観光業態との新しい協働により、より地域社会と密接なガイド活動を展開している。

登山ガイド活動が地域社会に対して果たす普遍的な役割としては、木曾駒ヶ岳を中心とした、学校登山や市民登山を軸とした地域社会の登山環境における安全管理、中ア遭対協における山岳地域の遭難対策がある。伊那・駒ヶ根市では中央アルプスの麓であるからこそこの学校登山や市民登山といった地域住民による登山という文化がある。その活動を支え続けてきたのは地域出身の登山ガイドであり、また彼らが引き継いできたサポート態勢であるといえる。さらに、県外からの登山者や登山ツアーと中央アルプスを結ぶ懸け橋として、南信州山岳ガイド協会が果たしてきた役割は大きい。今後の潜在的な役割としては、伊那市・駒ヶ根市の観光協会や観光関連企業、新しい南信州アウトドア協議会などとの協力体制を強め、新たな山岳観光の可能性を創出することがあろう。それは、中央アルプスという山岳地域における観光の持続的な発展に寄与すると考えられる。

V おわりに

本稿では中央アルプスにおける登山ガイド活動がいかにして地域で展開され、山麓の伊那市・駒ヶ根市においてどのような役割があるのかを、登山ガイドの具体的な活動実態の分析を通して明らかにした。その結果は次のようにまとめられる。

これまで述べてきたように、伊那市・駒ヶ根市における登山ガイド活動は、地元中学校の学校登山や地域住民対象の市民登山といった地域との密接な関係を基盤にして展開してきた。そこでは山案内人として重要である、登山者の安全管理だけでなく、中央アルプスの自然環境に関する知識について地域住民に発信・伝播する役割を担っている。さらに中央アルプス地区遭難防止対策協会の中心的会員としての事故防止、救助活動といった役割ももつ。また、南信州山岳ガイド協会が発足されて以後は、県外の登山者、観光客に対する山

案内人、インタープリターとしても機能するようになった。中央アルプスにおける登山ガイド活動の展開とその基盤にみられる特徴として以下の2点を指摘することができる。

第1に中央アルプスの登山ガイド活動が伊那・駒ヶ根市に古くから存在していたいくつかの山岳会の経験値に基づいて展開してきた点がある。それぞれの山岳会では、海外遠征登山、市民登山活動、学校登山の引率、遭難防止対策協会への参画、地域山岳関連イベントの主催といったことが経験されてきた。これらを通じて、登山ガイド、山案内人としての知識・技術創造や人材育成がなされ、それが今日の登山ガイド活動の基盤を形成している。

第2に南信州山岳ガイド協会発足による、各山岳会会員の枠を超えてのガイド組織の構築が指摘できる。南信州山岳ガイド協会では所属する登山ガイドへの活動の場として、学校登山や県外の旅行会社の登山ツアー、県内の観光協会などからのガイド活動の委受託をおこなっており、県内外の観光アクターと連携を図ることで能率的かつ継続的に登山ガイド活動を遂行することが可能となった。

こうして展開してきた中央アルプスの登山ガイド活動であるが、今後のガイド活動を持続的にするためには、南信州アウトドア協議会が取り組んでいる新たな地域DMO活動の中で登山ガイド活動を中心にしつつ、他のアウトドア業態といかにして連携しながら新たな役割を見出す必要性が示唆される。また、山岳会だけでなく南信州山岳ガイド協会においても所属ガイドの高年齢化が明白であり、新たな若手ガイドの人材育成を促進する必要性も指摘される。

本研究では、地域で発足した山岳会会員を中心として人材が育成され、地域在住の登山ガイドを中心としたガイド組織が学校登山や中央アルプス地区遭難防止協議会への参画などを通じて地域住民との重層的な関係性を構築する形態が明らかにされた。中央アルプス山岳域の事例は、地域山域を活かした登山ガイド活動の組織的な役割やガイド活動の成立基盤を検討するうえで特徴的であるといえよう。しかしながら、日本ではヨーロッパ

諸国のような山岳先進国と比べて登山ガイドの地位が相対的に低く、登山客がガイドを利用すること自体が馴染みのないものとなっている。南信州山岳ガイド協会においても、ガイド業を専業、す

なわち経済活動の中心とする登山ガイドは3名のみと僅少であり、ガイドの経済的な面からみた持続性という点については今後議論を深める必要があろう。

本稿の執筆に際し、南信州山岳ガイド協会の林様、知久平様、小川様、南信州アウトドア協議会会長木下様、宮田観光株式会社代表取締役社長春日様、伊那市観光株式会社総支配人浦野様、駒ヶ根観光協会奈良様、伊那山の会伊藤様、唐木様、飯田山岳会会長伊藤様をはじめとする登山ガイド・観光協会・山岳会・山小屋関係者の皆様にはデータ収集および聞き取り調査等において多大なるご協力を賜りました。また本稿の執筆にあたって、筑波大学生命環境研究科地誌学分野の教員および院生諸氏に貴重なご助言を頂きました。末筆ながら以上ここに記して厚く御礼申し上げます。

【注】

- 1) 登山者を案内して、山に登ることを職業としているもの。
- 2) 資格制度の統一化、ガイド資質の向上のため、日本各地の山案内人組織、山岳ガイド組織を結集して発足した日本山岳ガイド連盟が前身である。公益法人制度改革に伴って、2012年3月に公益社団法人として発足した。
- 3) 長野県が独自に認定している登山ガイド資格で、認定には登山における知識や技術のみならず、長野県のお山々や山小屋の歴史や文化などの知識が必要である。
- 4) 山に登る人、趣味として山に登っている人、登山客は登山ガイドやツアーの顧客。
- 5) 登山における荷物運搬人を指す。主に海外登山において、交通機関末端からベースキャンプまで、現地住民が登山隊の装備を運ぶ運搬人として活躍した事から使われるようになった。
- 6) 現在は、レンガの代わりに山荘で使用する薪を背負う形態となっている。
- 7) 菊池（2001）が提唱する登山ブームでは、第1次登山ブームを1950年頃から1960年頃を戦後登山ブームとし、第2次登山ブームを1963年から1970年頃を大衆登山時代、第3次登山ブームを1990年代初頭から現在としている。
- 8) 積雪期の登山で、雪崩に埋没した遭難者を捜索する為の電波送受信機。電波の送信と受信の切り替えによって、埋没者の位置を特定する。
- 9) スキー場外を滑走するスキーを指す。
- 10) 伊那市山荘条例第5条より。
- 11) スポーツクライミングやボルダリングをする為に作られた人工的な壁を指す。
- 12) 河原などにある大きな石を、登攀器具を使用せずに登ることを指す。
- 13) 麻績村の東筑摩郡筑北中学校も含まれる。
- 14) 主な学校は、早稲田中等部、中津川工業高校、トヨタ工業学園高等部である。

【文献】

- 石森秀三（2001）：内発的観光開発と自律的観光。石森秀三・西山徳明編：『ヘリテージ・ツーリズムの総合研究』国立民族学博物館，5-19。
- 菊池俊朗（2001）：『山の社会学』文藝春秋。
- 呉羽正昭（2009）：日本におけるスキー観光の衰退と再生の可能性。地理科学，64，168-177。
- 呉羽正昭（2011）：観光地理学研究。江口信清・藤巻正巳編：『観光研究レファレンスデータベース－日本編－』ナカニシヤ出版，11-20。
- 小泉武栄（1974）：木曾駒ヶ岳高山帯の自然景観－とくに、植生と構造土について－。日本生態学会誌，24（2），78-91。

- 敷田麻美編（2008）：『地域からのエコツーリズム－観光・交流による持続可能な地域づくり－』学芸出版社。
- 長野県山岳協会（2011）：『長野県山岳協会創立50周年記念誌』長野県山岳協会
- Kureha, M. (2008) : Changing ski tourism in Japan: From mass tourism to ecotourism. *Global environmental research*, **12**, 137-144.

